

小川洋子「完璧な病室」——対比構造から考える「名前」——

河野 有志郎 KAWANO, Yushiro

1、はじめに

小川洋子の「完璧な病室」は『海燕』一九八九年三月号に発表された中編小説であり、東京の病院に勤めている「わたし」と、自らが働く病院に入院することとなった弟との、病室での生活が回想される形で叙述された作品である。

本作品では、主要な登場人物が、「わたし」「弟」「夫」など代名詞によって表されている。また、弟の主治医が「S医師」という、イニシャルを用いた抽象的な呼称で表されるなど、作品として具体的な固有名を用いることが、意図的に制限されている印象を受ける。これは「わたし」の語りの中だけでなく、S医師との会話の中などでもそうであり、意識的に徹底された本作品の特徴であるといえよう。

登場人物が代名詞によって表されることは特別めずらしいことではないが、本作品において、作者が登場人物に固有の名前を与

えなかったことには、どのような意味があるのか。本作品から読み取れる具体性、抽象性の対比構造から考察していきたい。

2、具体と抽象の対比

まず本作品において「名前」がどのように捉えられているのかを見ていきたい。弟が入院することになり、病院の新患受付で「わたし」が、アナウンスされる患者の名前を聞きながら弟を待つ場面では、次のような記述が見られる。

かわいらしい名前、柔らかい名前、強固な名前、慎ましい名前。いろいろな名前があった。名前のイメージから病気の種類を想像してみた。どの名前にも、ぴったりの病気を思い浮かべることができた。

この部分は、固有の名前にはそれぞれその名前にふさわしい病気の種類という、具体的な情報が付随しているということを示している。

一方で人称代名詞に関して、「わたし」の弟に対する心情の変化が語られる場面では、次のような記述がある。

病にとりつかれる前の弟は、弟というかつちりとした枠の中で数学の定義のように存在していて、それ以上何も考える必要などなかった。

もし弟が病気になるならなかったら、彼を愛する方法をずっと知らずにいただろう。「弟」という簡単な一言で、二人の間を全部片付けていただろう。

固有の名前に具体的な情報が付随することは前に触れたが、逆に言えば代名詞など抽象的な呼称には、その文字自体に情報が付随することは少ないということである。それに加えてこの部分は、「わたし」ととって弟という存在が、正に単なる「弟」という具象性を持たない存在であったことを示している。これらから作品品において、「名前」の表され方には「わたし」の意識や心情が大きく関わっているということが推測できる。

以上をふまえた上で、次に本作品における対比構造について、特に「わたし」が何を求めている、何を拒んでいるのかという点

に注目したい。

「わたし」は過去の母親との関係から、汚れたもの、生活的なものに対して嫌悪感を抱いている。弟の入院している病室についての記述から、次の部分を参考にしたい。

わたしがこんなにも病室を好きなのは、そこに、生活がなかったからだ。病室には、残飯もない、油の染みもない、埃を吸い込んだカーテンもない。当然、腐りかけたきゅうりや、黴のはえたオレンジもない。

わたしは病室にほんの少しでも「有機体」が残っていると我慢できない。それが、母親と暮らしていた頃の、靴箱の上の腐りかけたきゅうりや洗濯機の中の黴のはえたオレンジのように、変性していくのが嫌なのだ。

これらからは、前述したように「わたし」が「生活」に対して嫌悪感を抱いていることが分かり、その対極にあるものこそが「わたし」が完璧とする「病室」であり、そこにいる完璧な「弟」であるということも分かる。「生活」と「病室」の対比については先行研究でも触れられており、山口哲理氏の「小川洋子『完璧な病室』を読む」(『マリ・クレール』一九九〇年二月)では、「病室」をはじめ「弟」「S 医師」などの言葉と、「夫」「母」「ダスト室」などの言葉の対比をはじめ、それらが単に対比されるだけで

なく、随所で共存している点に触れ、「無機的な清らかさに有機的なおぞましさをそつと寄り添わせることによって、いささかも不自然さと呼び起こすことなく、彼らは日常の中に存在しうるのだ」としている。また綾目広治氏の『小川洋子 見えない世界を見つめて』（勉強出版、二〇〇九年）には「生活」と「病室」の関係性と、「病室」の持つ抽象性について次のような言及が見られる。

「病室」は、抽象的な空間であるとも言える。一般的に言ってもそうであるが、「わたし」が「生活の薄汚さを、完璧に掃き出した場所」というふうに言うのは、実は「わたし」にとって「生活」とは、母が精神を錯乱させていたために、たとえば洗濯物が家中に散らばったり、ショートケーキが庭の花壇に置いてあったりしたような、まさに混乱して猥雑であった過去の生活を思い起こさせるものだったからである。それらに比べて病室はきれいに整理され、治療のためには余分な物は一切ない抽象的な空間なのである。

この部分から読み取れる「生活」と「病室」の関係性、そして「病室」の持つ抽象性を参考にして、本作品の登場人物が固有の名前を持たない理由と、具体性と抽象性の対比構造について考えていきたい。

本作品において唯一登場しているといえる固有の名前は、「わ

たし」が見学した手術の患者である「キムラ・ケイコ」であり、それに付随しているのが固有の病名である「チョコレート嚢胞」である。この「チョコレート嚢胞」は、「わたし」にとって「かわいらしい言葉」であるにもかかわらず、次に挙げる部分からはそれが嫌悪に変わっていることが読み取れる。

チョコレート嚢胞を思い浮かべながら、汚れたスプーンや皿を洗わなければいけない。チョコレート嚢胞色の残飯を、流し台の隅に積み上げていかなければいけない。わたしはまだ「生活」の気持ち悪さから逃れられずにいる。

つまり「わたし」にとって、「生活」とは正に具体的な情報（ここでは「わたし」にとつての「混乱して猥雑であった過去の生活」）が付随している固有のものであると考えられ、「キムラ・ケイコ」や「チョコレート嚢胞」などが持つ呼称としての具体性は、本作品における「有機体」が持つ具体性（「生活」と相互に関わりあう部分であると考えられる。それに対して、抽象性については「病室」「弟」と同様に「わたし」は好意を抱いており、次に挙げる部分からはそれを求めていることが分かる。

彼はわたしにとって恋人でも夫でも幼なじみでもなく、抽象的な人間だ。二人の間には思い出も未来もなく、死に近いだけだ。

ここでいう「彼」とはS医師のことであり、「わたし」はS医師に抱かれることを望む。「わたし」は自分にとって固有の存在ではないS医師に抱かれることで癒され、救われることを求めている。それは「わたし」が「生活」という固有のものから逃れるためであり、自分にとって完璧な「弟」とずっと一緒にいたいと思うからこそである。本作品において登場人物に固有の名前がなく、表現に抽象性が見られるのは、呼称の具体性が「生活」としての具体性と関わりあっていたことと同様に、それが主人公である「わたし」の「完璧」、「無機物」など、抽象性を求める心情を表したものであるからではないだろうか。最後に弟についての描写から、次の部分を引用したい。

弟が、露のついたもぎたての果実のように新鮮に見えた。

——このままひっそりと無機物のように清らかに生きていけたらいいのに。何も変わらず、何も変性せず、何も腐敗せず、このままずっと弟と一緒にいられたらいいのに。——

後者は前述した「わたし」の願い、求めているものが読み取れる部分である。そして前者は、本作品において「わたし」の嫌悪感の象徴などとして多く登場する果物と「弟」を重ね合わせた部分である。ここで用いられる果物がオレンジやぶどうではなく、

「果実」という抽象的な名詞で表現されていることに注目したい。この固有性を持たない一文で表現されているものこそ、本作品で登場人物が人称代名詞などの代名詞で徹底されていることの理由であり、ここから「わたし」の内面と共に、呼称をはじめ表現上の特徴においても、具体性と抽象性の対比が表されていることが考えられる。

3、おわりに

ここまで本作品において登場人物に固有の名前が用いられていないことについて、本文中から読み取れる具体性と抽象性の対比構造から考察してきた。本作品において名前だけではなく、「弟」の病気に具体的な病名が示されていないことなども含め、多く読み取ることができる表現上の抽象性からは、「わたし」の心情と同様に具体性と抽象性の対比が確認できる。本作品において弟が「弟」であることや、「わたし」が弟の入院している部屋を「病室」とだけ表していることには、「わたし」の無機物を求めるという心情との関わりを見ることができ、呼称という部分においても「わたし」の求める「完璧」性が表現されていると考えられる。

*本文引用はすべて、小川洋子『完璧な病室』（中公文庫、二〇〇四年）による。